

子供と環境(二)

山下 俊 郎

二 環境をどう考へるか

前に述べた様な色々な事情からして、子供を取り扱つて行く教育の上に環境といふものが非常に大事な意味を持つて來るのであるが、この環境に就いての色々な問題を考へて行くに就いて、わたくし達は先づ少なくとも二つの問題をよく考へて態度をはつきりき定めて置かなければならない。その第一の問題は一體何を環境と言ふかといふ事であり、第二の問題はこの様に考へられた環境といふものを教育の立場からどういふ風に考へるべきかといふ事である。

先づ第一の問題、即ち何を環境と言ふかといふ事を考へて見たいと思ふ。

環境といふのは一人の子供を取り巻いてゐる世界である。この子供を取り巻いてゐる世界を名づけてわたくし達は外界と言つてよいだらう。然し外界といふは單に子供を取り巻いてゐる世界といふだけの事である。環境といふ以上はこれは決して單なる外界であつてはならぬ。環境は子供をきり巻いてゐる外界のうちで、子供と何かの交渉を持ち、子供に何かの影響を與へてゐる一部分だけを言ふのである。然したゞかういふ風に言つてしまつただけでは何だかきこく頼りない様な氣がする。右の「子供と何かの交渉を持つ」こいひ、「何かの影響を與へる」こいふのが一體どの様な目印で定められるかこいふ事を、わたくし達は何もなく探り度いのである。

そこである人達は「子供が絶えず接觸してゐる外界」こいふものが環境であるを考へた。これは、一番普通に考へられてゐる

る環境の考へ方であると言つていゝ。「あの子供は環境が悪いから」言ふ様な事を言ふ場合には子供を絶えず取巻いてゐる人々や物がよくないといふ事を普通は意味してゐる。ところが子供が絶えず接觸してゐない外界であつても、唯一度接した切りで恐ろしい影響を持つ事がある。かういふものは假令唯一度接した切りであつても矢張り環境を考へなくてはならない。そしてまた極く嚴密に考へて見るこぼんみに「絶えず」子供に接觸してゐる外界といふものは實際にはないのである。例へば家庭といふものは、勿論子供にこつて大事な環境であるけれども、子供が幼稚園なり學校なりへ行つてゐる間は子供は家庭から離れてゐるわけで子供は家庭といふ外界に「絶えず」接觸してゐるとは言へない。それだから言つて家庭が子供の環境でないとは言へないのである。かう考へて見るこ子供を絶えず接觸してゐるものだけが環境だとは言へないわけである。またある人達は、子供が、これは「自分の生活してゐる世界だ」といふ様な親しみを持つた外界が環境であると言つてゐる。かういふ親しみを持つた世界といふものはなる程子供に強い影響を持つてはゐる、然しそれだけならばかり影響を受けるこは限らない。この事は前の「絶えず接觸する世界」といふ所で考へたのと同様であるし、また知らず／＼のうちに子供が影響を受けてゐる環境といふものはその考への中に入り切らないのであるから、かういふ考へ方もまだ充分とは言へないのである。

かういふ風に考へて來るこ、環境といふものを定めて來るのに、子供を環境との交渉の仕方をはつきりこ擱んで、環境をさうでない外界との限界といふものを定めるこいふ事は中々さう簡單に形式的には行かないのである。そしてこれはさういふ所にさういふ困難さの原因があるかと言ふ事を考へて見るこ、わたくし達に環境といふものをさう考へなければならぬかといふ事をはつきりして來ると思ふのである。

そこでわたくし達は、環境といふものは、さこからさこまでが環境であつて、何處からささが環境でないこいふ風には

つきり空間的に場所を定められるものではないと言ふ事を先づ考へなければならぬ。環境は一人の子供に何かの交渉を持ち、何らの影響を與へる外界の一部分である。わたくし達はさきに言つた。まゝでこの「何かの交渉を持つ」言ひ何かの影響を與へる言ひは、外界それ自體の性質ではなくて子供との關係である。環境は言ひは子供との關係に於て考へられる概念である。子供をぬきにして何處から何處までが環境である言ひは風に考へる事が既に無理なのである。子供に對するは、たゞきに於て、子供に對する意義に於て考へられるものが環境である。だから嚴密に言ふならば環境の範圍は子供によつて、また年齢によつて違つてゐるのである。單に子供の生活してゐる場所といふ事だけから考へて見ても、二三歳の幼兒に於ては家庭が唯一の生活の場所であるが、もつと大きくなるに幼稚園も子供の生活の場所であり、學校も生活の場所である。それだけ大きい子供の環境は廣くなつて來てゐる言ひは、わけである。

このやうにして環境は子供との關係に於て、子供に對するは、たゞきに於て、子供への意義に於て考へらるべきものであるから、わたくし達は子供を取り巻いてゐる外界のうち、凡そ「何かの影響を與ふべきもの」を凡て環境と考へなくてはならないのである。こゝまでが環境である言ひは風に落ちついてゐるわけには行かないのである。

さてこの様に考へらるべき環境を子供の教育の上から如何に考へるべきであらうか。わたくし達は次にこの問題を考へなければならぬ。

教育の上から考へらるべき問題といふのは、環境と子供との關係、即ち言ひ換へるならば子供の個性の形づけをしてゐる環境の力によつて結びつけられてゐる環境と子供との關係を教育上どういふ風に利用して行くかと言ふ問題である。

かういふ點から考へるに、先づ第一にわたくし達の眼前に浮いて來る問題は、現在教育者、保育者の眼の前に立つてゐる

一人の子供の個性である。この子供がいま、大きくなつて来るまでの間に、その個性の上に影響を與へて來てゐる環境がさういふものであつたかと言ふ事、そして現在その子供がさういふ環境に在るかと言ふ事は子供の現在の姿である所のその子供の個性を理解する上にさうしても缺く事の出来ないものである。現在在る子供の姿の上に影響してゐる環境さういふものは、現在眼の前に立つてゐる子供をこれから教育して行く場合の出發點なるものであるから、わたくし達はこれを出發環境と呼ぶのである。この出發環境は子供の現在ある姿を理解する爲に、さうしても、理解せられなければならぬ環境である。そしてこの理解の上に立つて教育者は、自分の教育理想によつて心の裡に描いてゐる目的——これに在る環境に手を入れて、その環境が教育的に見て目的に適ふ様に、環境を整理し、整へてやり、統制しなければならぬ。この様に統制せられた環境をわたくし達は教育的環境と呼ぶのである。かういふ風に考へて來るに、わたくし達は、教育的立場から考へるに、ブーゼマンに倣つて、三種類の環境を區別する事が出来るのである。即ち出發環境、教育的環境、目的環境の三つがそれである。つまり、子供の現在ある出發環境を充分に理解し、これに對する足らざる要素を補ひ、歪められた要素を矯め直し、目的環境に到達し得る様に、教育的環境を創り出して行く事が即ち教育の仕事であり、保育の任務であると言つていゝのである。

然し、現在の所、出發環境の理解さういふ事さへも充分に行はれてゐないのが、實狀であると言つていゝ。わたくし達は主な基本問題を考へた後に、具體的環境に就いて、出發環境の理解さういふ事を中心に置いて述べて行きたいと思ふ。